

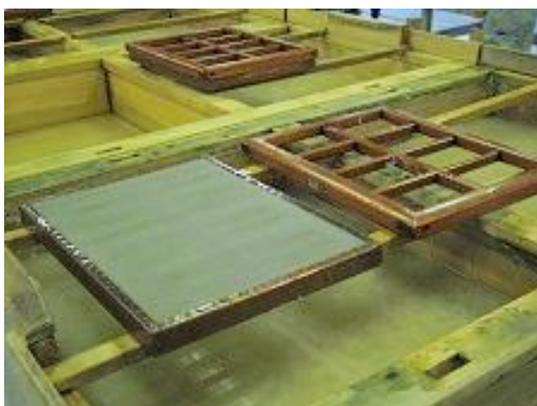
土佐和紙めぐり

2019年10月中旬、高知県に旅した折、伊野町にある土佐和紙の関連施設をいくつかめぐったので、その模様を簡単にまとめました。

○土佐和紙工芸村くらうど

高知駅からJRとバスを乗り継ぎ到着したのは、山に囲まれ、目の前を仁淀川が流れるロケーションにある「道の駅」です。一度の漉きでハガキが8枚漉けるコースを体験してきました。

ネリと繊維と水とが混ざり合っるとろりとした感触の楮液を、スタッフの方の指導のもと箕桁で汲み上げ、何度か揺すってから桁を外すと、楮がハガキの形に残ります。が、思っていた以上の厚みになっていました。あれ、ハガキにしても相当分厚いのでは、と動揺しましたが、この後プレス機で圧縮するので厚みは落ち着きます。



金網（箕・す）と木枠（桁・けた）



上から押さえて軽く水切りした状態

とはいえ、それでもかなりしっかりした厚みで、ふわふわとした「耳」もあり、いかにも手漉きという雰囲気の仕事になりました。



プレス機（この後、熱板で乾燥）

〇いの町紙の博物館

折り返しのバスに乗ってお次は山のふもと、町中にある和紙博物館にて紙漉きの「はしご」をしました。こちらハガキを8枚漉けるコースです。

「水のきれい量が違うということは、傾いているということですね」ともっともな指摘を受けながら漉くこと4回。水平を保つのは難しいです。しかし都合4回楢の液にくぐらせるので不思議に思い、「4回も漉くんですか」と伺ったら「見て判断しています」とのこと。どうやら汲み上げた楢の量やきちんと揺すれて（漉けて）いるかをチェックした結果、それだけの回数が必要だと判断されたようでした。それにしても運動不足の身には、たかだか4度の漉きでも簀桁を支える腕が辛かったです。

何度も漉いたおかげなのか紙質が緻密な印象で、先ほどより濃いベージュ色のハガキが漉けました。



同じように楢を使用しているのに厚みも手触りも全く違うものができあがるのが不思議で、ここが天然素材の面白く、かつ、コントロールの難しい点でもあると思います。

左：土佐和紙工芸村くらうど 右：いの町紙の博物館

こちらの施設には和紙の製作工程の展示もあり、紙を漉く槽や原料を運ぶカゴ、簀桁など道具類も色々陳列されていました。



簀を編む様子



簀桁各種

また、紙漉きの実演も見ることができました。使われていたのは私が体験したものよりはるかに大きなサイズの簀桁で、「あれより何倍も重たいのだろうな…」と作業の大変さを思いましたが、それでも滑らかな動きにほれぼれと見入ってしまいました。

土佐といえば典具帖、と思ったので少し伺ったところ、典具帖紙は「ネリをきつくきかせて膜を作り、原料が落ちていかないようにしてやって（普通の簀では目が粗いので絹の紗を使うことも）（※1）、あとは何度もくぐらせて、激しく揺すって繊維をからめ」て作るのだそうです。実演をしていた方によると「あれはほんっと大変！」とのことでした。

○吉井源太翁生家

吉井源太氏は紙漉きの道具の改良、生産・流通の土台の整備など、土佐和紙の生産力向上に大きく寄与した人物だそうです（※2）。生家が保存・公開されているとのことで、訪ねてみました。

建物は現在ひ孫にあたる方が管理されており、当時の道具類や、吉井源太氏が漉いた紙も現存していました。和紙の原料や手法に様々な違いや長い歴史があることはうっすら知っていても、道具の改良については全く思い至らなかったのですが、どこかで誰かが改良を重ねてきたからこそ、こうして和紙が全国に流通し、残っているのだと改めて気づかれました。



玄関



およそ 130 年前に漉かれた紙

この日はあいにく天候が思わしくなく、降ったり止んだりを繰り返す中での移動は少々厄介でもありましたが、普段なかなかできない体験のできた良い一日となりました。次に高知県を訪れる機会があったら、「土佐典具帖紙」の漉き場にも行ってみたいです。

※1 簀の跡を和紙に残さないため、という理由もあるようです。

※2 参考：『土佐紙業の恩人 吉井源太（いの町紙の博物館発行）』

オマケ：コウゾ三種



コウゾ@いの町紙の博物館



ヒメコウゾ@高知県立牧野植物園



ツルコウゾ@高知県立牧野植物園

修復本科 水野牧子